

暖冬なれど、冬は冬

笠井和明

記録的猛暑の後、だらだらとした暑さが続いたものの、秋を通り過ぎ、いつの間にやら師走である。

こんな異常気象の年であるので、たいした寒さにならない事を祈りたいのであるが、冬には冬の都合もあるだろうから、そればかりは何とも言えない。

社会が不況だと、増えた増えたと常に言われる路上生活者の数も、どこが基準で増えたのか、減ったのかは良くは分からぬが、相も変わらず新宿の炊出しには400名近い仲間が毎週並び、パトロールでもすれば、その数以上の寝姿が確認できる新宿の夜の姿は、そうそうどこがどう変化したのかも良くは分からない。

東京で言えば「地域生活移行支援事業」の前と後で、明らかにその数や形態は変化した、この時はバブル崩壊以後の景気は循環程悪い時ではなく、リストラが一段落し、雇用も持ち直したと云われた頃である。そう云う仕事が出ている時に、それなりの有効な施策があれば、大きな変化と云うものが期待

されるようで、好景気に乗るように背中を押してくれた施策にはこの事業は、なったのであろう。

しかしながら、今は大卒でさえ超氷河期と云われる雇用情勢。中高年のおっちゃん達が気軽に再就職できる世ではない。そうなると、いくら知恵を出して色々な施策を出してみても、一体どこに乘れば良いのかいと云う問題が生じる。

セーフティネットと云う言葉が、リーマンショック以降流行っているが、どこにそんな「安全網」が作られたのかいなど、流行語は流行語で中身の無い議論ばかりに終始しているようである。これに飽き足らないのか、最近は「絆の再生」「伴走的支援」などと云う、これまた情緒的過ぎて何を差しているのか良く分からぬような用語まで出て来たようだ。

新しい言葉が出ると新しい問題が起ったような錯覚に陥りやすいが、よくよく見てみれば、実社会の中ではそんなに新しい問題がにぎにぎと生えて来るような事はない。たいがい古い問題のぶり返し、時代に合わせたバージョンアップのようなものである。

問題が複雑化、もしくは変容、ないしは枝葉がただ伸びているだけなのかも知れないのに、その変化を整理、理解しようともせず、それぞれをバラバラに分断し、分断するならまだしも、その内放置してしまい、関連性をより曖昧にする発想は、どう考えても支持はできない。

船頭が多すぎると船が動かないのと同じく、専門家が多すぎるとこれまた何も動かなくなってしまうの姿と同じである。



まあ、それはともかく、第二のセーフティネットと云うものが、かのリーマンショック以降叫ばれ、構築されたのは記憶に新しい。もはや金属疲労を起こし、本来の対象者すら切り捨ててしまっていた雇用保険関連の失業給付金対策や、現金給付に終始し、あとは野となれ山となれの生活保護関連の諸施策、また周知の通りの年金制度の崩壊的事態、これらの旧態では、深刻化する経済危機と雇用破壊に対応できないと云うのが共通認識であったのであろう。

旧来から自立支援策が実施されていた路上生活者のみならず、住居喪失不安定就労者対策であるとか、住居喪失離職者対策であるとか、失業者対策の側面からも住居がない、もしくは不安定な人々への対応策が、旧態を改革してと云う手法ではなく、新たに付け加えてしまえと云う手法で名前をこころと変えながら、雨後の筍のように出てくるわ、出てくるわ状態となった。

まあ、これは国や厚労省だけの問題でなく、連合なのども「三層構造による社会的セーフティネット構想」を提起したりと、企業の責任をできるだけ回避させながら国家に新たなセーフティネット制定を求める動きなどの総合的な結果でもある。

住居喪失と云う共通の課題から導き出されたのが「住宅手当」であり、なかなかの名案であると思うが、その運用においてはそうそう一筋縄では行かないようで、実際の所、各種貸付金制度との併用でなければ利用が難しく、利用に躊躇する人々もあり、そして、結局の所、先の展望がない半年間の「つなぎ」でしかなく、半年過ぎれば元の木阿弥、借金まみれと云う失業者をただ増やしているだけのようにも見える。仕事の展望であるとか、生活の展望が一定程度ある人に限っての「ご利用は計画的に」の施策でしかなく、これを住居喪失状態への解消策としてスタンダードにするのは、無理があったようである。



る。

東京の「地域生活移行支援事業」との決定的な違いは、住宅の量的な確保を公的にやらず、情報提供に留め、その斡旋などはお金を貸付け、フォロー体制をしっかり設計せず見切り発車的に実施してしまったところにある。しかも好景気時に2年もしくは3年の利用期間があり、臨時就労など直接就労の機会を与えた、ある意味余裕のある組み立て方をしていた「移行支援事業」とは違い、就労支援も生活支援もたらい回しの体制の中、乱暴に言えば「金だけ貸すから半年間で自分でどうにかせい」と云う仕組みであった点である。

もちろん、この施策が無意味であるとは思わないが、路上生活者対策の東京における展開をつぶさに見て来た目からすれば、どことなく中途半端に思えてならない。

貸付と云う手法を取るのか？緊急雇用を提供するから自分で稼いでねと云う手法を取るのか？ここら辺が分岐点になっているような気もする。

これも、あまりにも（夢の）正社員化にこだわりすぎた結果であろうし、ターゲット層の実相を見誤った結果であろう。「急いては事を仕損じる」の典型例か。

もちろんリーマンショック以降の急速な景気減退は予想不可能な事態であり、当時はこれで仕方がなかった側面もあるが、その後政権さえ変わったと云うのに、要件が多少緩和された程度の同じ「つなぎ策」をだらだらと垂れ流しているのはもはや喜劇としか思えない。

住居喪失状態へのもう一つの対応として緊急宿泊と云う手法もある。これを収容所方式で大規模にやってしまったのが昨年末の「官製派遣村」である。これは新政府と東京都が先頭に立ち、労働も福祉も垣根を超えて総合的な対策をしようとしたものである。

住居を失った、もしくは不安定な人々の再起のために、臨時的な宿泊所を設置し、健康を回復させ、気力を促すのは、山谷対策の歴史を見るまでもなく極めてオーソドックスな手法である。その意味では評価は可能である。

しかしながら、この手法は今に始まった事ではないのでいろいろな変遷がある。

東京においては、短期宿泊の山谷対策方式から路上生活者対策の過程で、ステップアップ方式を編み出し、シェルターで健康回復、就労準備、技能取得をプログラム化し、その後自立支援センターでの本格就労支援、住宅問題では自立支援住宅の設置、転

宅支援などの丁寧な組み立てをして来た。現在自立支援事業の再構築で若干のブレはあったとしても、基本的な考え方は、単に宿泊させるだけでなく、そのステージを利用しながら、次のステージを模索していくステップアップ方式は揺るいでいない。

こう言う先人達の教訓が何も生かされず、単なる「政治ショー」に住居を失った失業者を利用したのが「官製派遣村」と言っても過言ではない。

何の計画性もなかったが故に利用期間も利用施設もころころ代わり、揚げ句の果てに2万円脱走者を多数排出し、自立支援の方策が何も準備されていないから、「つなぎ」の「つなぎ」の生活保護行政に任せてしまえとなってしまうのはこれまた記憶に新しい。こう言うどさくさまぐれの生活保護適用ばかりやっているから、ワンストップとは名ばかりで、一向に保護行政と労働行政は一体化、総合化しないのである。

こうなれば当事者の方も、仕事をしたいのに生活保護を強要され、何が何だか良く分からなくなり、行政不信を生み出すだけである。

流石にこんな混乱は二度と起こしたくないので、東京都は早々に「東京労働局と連携した生活・就労支援の強化」の代替案を打ち出し、「官製派遣村」からの卒業を宣言した。

この判断は東京都が独自でも「走りながら考え」実施して来たこれまでの路上生活者対策の流れを鑑みれば、一方では正しいが、他方では、これが、かの東京都かよと思うほど正しくない。

東京都による「年末に向けた生活・就労支援強化」とは、都内各ハローワークに常駐している住居・生活支援アドバイザーと、新たに配置する東京都生活・住居相談員が協力しながら、住居を喪失した失業者に対し、住宅手当や貸付制度の手続支援や生活支援を行い、同時に緊急雇用創出事業での仕事出しも実施すると云うものである。

何が正しいかと云えば、住居を失った失業者に限定し、緊急雇用創出事業を前倒し実施し斡旋し、また臨時的な雇用創出を、民間からの企画提案などを受けながら提供すると云う点である。

これはまだ動き出したばかりなので、実際の評価はこれからなのであるが、「地域生活移行支援事業」で実施した臨時就労提供と同じ発想である。

困窮度の高い人々の層にターゲットを定め、緊急就労を集中投与する手法は、日雇対策、山谷対策での職安、城北福祉センターによる「特別就労」でお馴染の手法であるが、それを「地域生活移行支援事業」でも転用し（実は、途中で景気良化のため緊急

雇用創出事業がなくなってしまったが）、昨年末からモデル事業的に実施されている「緊急就労・居宅支援事業」（「地域生活移行支援事業」の生活、居住、就労各サポートを一体的にNPOに委託した半年間限定の借上げ住宅提供及び直接就労提供及び転宅支援事業）でも発展的に採られ、そして、ようやく住居を喪失した失業者にも提供されるようになったと云う構図である。

失業者に直接雇用をと云う旧来の失対的施策は、国が消極的な間にも、躊躇しながら、またいろいろバリエーションを作りながら東京都では細々と実施されていたのである。

しかしながら細々だとこれは困る。もっと山谷にも特就を出せとか、路上生活者対策にももっと積極的に活用せよと云う声に、今の状況下だからこそもっと耳を傾けるべきであろう。これはもはや東京都と云うよりも、戦後の失対事業をまともに総括せず、また発展もさせようとしなかった国の労働行政の責こそが大きいのであるが。「新しい公共」があるのであれば「新しい失対事業」もまた模索すべき時ではないかと思うのであるが。

まあ、それはさておき、東京都の年末対策、何が正しくないのかと云えば、肝心の宿泊場所の確保を住宅手当だけに依存し、緊急宿泊を完全に忘れてしまった、もしくは完全に抹殺してしまった点である。もうやりたくはないと云う感情論としては分かるのであるが、これは総括の仕方が間違えている。

年末だけの政治ショーは間違っている。これはまったく正しい。年末年始だけに失業者が困っているのではなく、これは通年的な問題であるからして通年的な相談体制を作るべきである。これも正しい。その中でも年末にかけて困窮度を増す失業者への対応として年内にキャンペーンを張り相談体制を作りましょう。これも正しい。



住居を喪失している人々が対象であるならば、住宅手当と緊急宿泊を段階的に使い分け、居住確保のためのプログラムを作り、直近に失業した人のみならず、日雇の人や、長期に野宿しながらも再就職への強い意欲のある人々も包摂しながら自立を支援しましょう。もちろん、既存の山谷対策や路上生活者対策や疾病時の対応など保護行政とも充分リンクしていきましょう。

これが本当は正しいのであるが、何故かしらそのような総括はしなかったようで、住宅手当と貸付制度の手続き支援に留まってしまった。

もちろん緊急宿泊などは、収容所方式の大きなものでなく、小規模のものを点在させれば良い。単純に考えてみても、住宅手当なり貸付金なりに申し込んだとしても、申請が受理されるまでの間の生活はどのようにしたら良いのか？要件不備で申請が却下された場合はどうするのか？その段階で相談者は諦め去っていくしか方法がなくなる。

今のままで運用をされるとなると、申請が受理される条件が明白であり、かつ申請が受理されるまでの間、所持金と住む手だてがある人々（住居を喪失した失業者の中では恵まれた人々）しか事業の対象にならなくなってしまう。もちろん所持金がなく、住所が定かではない野宿をしている人々や、日雇の人々は自ずからお断りとなる。

こうなると気安くハローワークに行ってみようとは云えなくなるのである。

このスキームには何らかの含みがあるのか、それとも関係部局間の調整が不発であったのかその裏側は知りえぬが、また労働行政サイドが「変な仕組みを作った」で終わってしまわぬよう、原点に戻ってもらいたいものである。

小さな網を気分に任せてあちこち作っては捨て、作っては捨てでは、第2のセーフティにすらならない。こんな体たらくでは第1のセーフティネットをガラガラポンした方がよほど早いのでは？と云う議論も起ってくるであろう。年金制度の本体でさえ存続が危ぶまれている中で旧態依然とした第1のセーフティネットを守るために弥縫策たる第2を付け足したとしても、それもいつまで持つのか。

かつてバブル崩壊後のホームレスの出現に対し、景気要因説と云うのが主流で、景気が立ち直ればこの問題は解消すると云うのが一般的な意見であった。ところがどっこい、かつて日雇労働などに従事していた中高年齢者の労働力余りは公共事業の削減や産業合理化などの流れによって固定化され、多少

景気が良くなったぐらいではどうにもならなくなり、結局は背中を押す効果的に施策を実施しなければ大きな変化は起こり得なかった。労働市場のグローバル化に政策的に大きく遅れを取ったのが敗因であるうが、移民労働によって本国労働者の職場が奪われて行った欧州諸国のような構図にこの国の産業もなりつつある。底辺下層の労働力は行き場を失い、街中を彷徨い続け、様々な「新たな問題」として表現され続けている。これを労働者サイドの啓発と自覚だけで乗り越えられるのか？いやいや高学歴、キャリアの人なら我慢は出来るだろうが、決して個人の努力ではどうにもならず、船頭がどうしても必要なのが下層の現実でもある。

たとえ景気が安定したとしても、一度失ったものは元には戻りようがない。また、一度都会に上って来たものはなかなか地方には戻り得ない。

が故に強力な政策が必要となるのであるが、先の展望のない「つなぎ」のオンパレードでいつまでつないでいられるのだろうか？

まあ、こんな呑気な事をここでつべこべ言っても二べもないのであるが、同じ「つなぎ」なら、働かせて稼ぐと云う基本の習慣を失わずに「つなぎ」しかなかろう。要はお金の使い方の問題である。ハローワークを中心とする再就職支援の様々な施策はもはや飽和状態である。それはそれで職員確保と云う雇用確保にはなるのかも知れないが、底辺の人々にとってみれば、その仕事をちょっとくれやとなる。ここは思い切って仕事を紹介できないハローワークでの相談機能はもっと効率化しながら、余ったお金で緊急雇用対策事業など公的就労としてどばっと出し、失業者をまずは日雇にでもした方が、よほど「つなぎ」としての効果、ステップアップの地場慣らしくらいにはなるだろうに。

そんなこんなで（？）路上は今や平穩無事な姿で排除され続けている。頼みの綱であったホームレス自立支援法も時限立法なので、あと2年もすれば効力を失う。議員立法で作ってしまったのが良かったのか悪かったのか、今や超党派でどうかしようとする気運すらなく、ピークパーチクの中どうやって大同団結するのやら。

まあ、自立支援と云うこの法律が目指したものがどれだけ具現化したのかをしっかりと検証してもらい、せめて自立支援事業だけは汎用的にでも構わないので後世に残し続けてもらいたいものであるが、今や自立支援センターに光すら当てられる事もな

く、黙々と効果的な施策が続けられている。

あと2年の中で、どれだけ箱物発想の自立支援センター、正社員化しか目的としないプログラムを脱却出来るか？これが残るか否かはそこいら辺にかかっているであろう。

「地域生活移行支援事業」も本年最終的に終了し、そして次は自立支援センターもなんてなれば、これは頭を抱えるしか他ないであろう。そうならないために民間サイドも奮起せねばならぬが。

まあ何も新しく、また突飛な事を提案するまでもない。路上の仲間の自立支援のための手法などは既に確立している。後はどの程度の規模で出来るか？バリエーションをどのように増やすかだけの問題である。冬は寒く、夏は暑い。私たちの支援も相も変わらず季節の中で右往左往しながら、定番の事業を淡々とこなすだけである。

この淡々さが我慢できぬとなると、それはそれで困ったものとなる。東京都が「官製派遣村」を行わないと発表したら、連絡会の越冬も今年はないのではないのか？などと言う愚問を良く頂くが、こちらは「政治ショー」ではないので、いつもの通り仲間と共に往行に決まっておる。

ここ数年の貧困ブームはもはや常軌を逸しているようで、そろそろ正気になって「正義の味方ごっこ」

は止めにしてもらいたいものであるが、それもまあ、沈静化をするのであれば、久方ぶりに地に付いた越冬がのんびりと出来るであろう。

その昔、とある仲間から「この世界は目立つ事が一番宜しくない、目立ったからと言って良い事など一つもなくロクなことしか残らない」とのご託宣を頂いた事があったが、まさしくその通りで、その座右の銘を常に胸に抱いて活動をしているのであるが、新宿と云う土地柄か、図体だけはでかいからか、つつい目立ってしまっている。

支援物資も充分集まっているし、財政もそうそう危機的でもないし、ボランティア諸氏も定着しつつある。と云う事で、今年の冬はそうご心配頂かなくても大丈夫そうである。しかも暖冬傾向にある。

暖かく見守って頂ければそれで良い。マスコミ諸氏も新宿などに来ずに、尖閣諸島にでも張り付いて欲しいものである。

静かな年末年始の新宿の冬を、誰にも邪魔されず、仲間と共に過ごしたいものである。

(了)

2006-2010 炊出し実数推移





この夏の死者を追悼

新宿夏まつり650名で開催。

8月14日-15日、恒例の新宿夏まつりが新宿中央公園で開催されました。

14日は前夜祭。この1年亡くなられた仲間を皆で追悼しながら、カラオケをやったり、映画を見たり、そうめんを食したりと前夜祭は300名近い仲間を中心に夜遅くまで暑気払いです。

翌15日は灼熱の陽射しの中、お昼から中央公園に続々と仲間が集まります。かき氷を食べたり、すいか割りなどのゲームをやったり、衣類を選んだりと暑さにめげず夕方までには650名が集まり、晩のカレーライス炊出しとビールを片手に納涼コンサートを楽しみ、盆踊りを踊って、死者を弔う仲間の祭りが今年も無事に終了しました。

結核検診も合同で実施。

昨年に引き続き、夏祭り当日は新宿福祉事務所、新宿保健所と合同で結核検診会や医療相談会も同時に開催されました。今年は結核検診に221名、医療相談会に58名が受診してくれましたが、当日結核罹患が疑われる仲間は1名のみと、日頃呼びかけている健康管理の成果が良い方向に現われ、ほっとしております。結核検診会は10月にも福祉事務所前で実施され、こちらも62名が受診し、合わせて283名の仲間が受診されました。

新型自立支援センター稼働開始。

東京都、23区合同の自立支援事業再構築により変更が決定された新型自立支援センター港寮が8月より開設され10月から本格稼働となりました。港寮開設に当たり公開されましたので、連絡会からも見学に行ってきました。かつての芝浦寮にも近く、大変懐かしい場所でしたが、新たに始まった再構築の行方を見守りたいと思います。

田島巖さん追悼。

これまで多くの仲間の農業研修の受け皿になって頂いた長野県千曲市の田島巖さん（69）が7月26日、お亡くなりになりました。脳梗塞の後遺症とのリハビリ中の突然の訃報に大変驚き、悲しみにくれています。元気な頃、新宿の炊出しにも来て頂き、仲間を励ましてくれていた姿を思い出します。都会と農を結びつけて頂いたご苦勞を思うと断腸の思いです。

無念、追悼…。

新宿連絡会 会計報告

2010年7-10月報告

今期も多くのご支援を頂き、夏から秋にかけての日常活動を支えて頂きました。どうもありがとうございます。これから越冬と連絡会が最もお金を使う季節となりました。頂いたお金は仲間のために全て使い切ります。引き続きご支援宜しくお願い致します。

2010年度7-10月期 新宿連絡会会計収支報告

収入)		支出)	
炊出部門寄付	562,020	炊出し事業費	1,119,996
夏まつり寄付	36,000	池袋支援費	55,000
その他寄付	2,562,610	夏まつり事業費	696,995
前期繰越金	105,589	活動管理費	30,832
		衛生費	4,267
		旅費	62,800
		交通費	206,115
		通信費	6,636
		消耗品費	34,818
		事務用品費	24,712
		両所費	920,000
		事務手数料	8,128
		支払雑費	250
		前期繰越金	105,589
		次期繰越金	△9,919
合計)	3,266,219	合計)	3,266,219

越冬用毛布、ホカロン、食材などを募集しています。

現在、600名近い新宿の路上の方々に私たちは様々な支援を行っています。中でも衣類の問題は、路上の方々にいつも清潔で、世間から後ろ指をさされぬためにも重要性が増しています。冬場は防寒用に厚手の衣類（防寒着類）や毛布類を集中して提供していきます。

また、炊き出し数増加による炊出し用のお米の緊急募集もこの間行っていました。お陰様でお米は順調に集まっています。今の現状では、炊出しに関しては年を越せそうな感じでございます。

他方で、冬場に必要なものはこれから集めていかざるを得ません。

とりわけ、毛布、布団（薄手の布団類）、寝袋類、医薬品、石鹸、タオルなどの日常品が不足しております。

衣類に関しては男性もののジャンパー、コートなど防寒用の上着類が不足しております。

皆様のお気持ちに感謝し、そしてそのお気持ちを路上に届ける役目を私たちはこれからも果たしていきたいと思っております。

引き続きのご寄付、宜しくお願い致します。

この冬、主に必要なものリスト

毛布	寝袋	布団（軽いもの）
タオルケット	タオル	
男性もの防寒着	男性ものセーター類	
靴下、下着	帽子、マフラー	靴（革靴でも可）
ベルト	石鹸	シャンプー
ボディソープ		
ホカロン	食材	医薬品

*このリスト以外でも受付可能な衣類はありますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

*連絡会への衣類寄付は残すことなく路上の方々にお渡ししています。フリーマーケット等への転売目的での募集ではありません。

*女性ものの衣類は連絡会は受け付けておりませんので、ご容赦下さいませ。

2010~2011

静かな冬

第17次新宿越年越冬

2010年12月29日（水）～2011年1月3日（月）

＜ところ＞ 新宿中央公園～水の広場

炊き出し準備 連日11時集合。炊き出し連日（27日は晩飯のみ）＜昼飯＞正午配食＜晩飯＞午後7時配食。医療テント（29日より）24時間体制。連日夜間パトロール、深夜、昼間も有り。夜は頑張れ越冬コンサート、新春映画祭など。31日は年末大イベント、正月は新春餅つき大会など仲間を励ます企画が今年も盛りだくさん。都合の時間には是非中央公園に！

越冬闘争資金カンパ
毛布、ホカロン、
医薬品
募 集 中 !!

主催・新宿連絡会
090-3818-3450

詳しくは
<http://www.tokyohomeless.com>

●越冬活動カンパ 活動資金の振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。
オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One（ギブワン）」（登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。）からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●越冬関連のカンパ物品送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物及び毛布、医薬品、米などのカンパ物品は
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛て
（平日9時～5時で受取が可能です）をお願いします。